

女って、鋭いなあ

そこで、三条京阪まで、暗い道を歩いて行く。

駅前のうどん屋で、天ぶらうどんをおごってもらった。

健ちゃんからは、一年半ぶりで、

「よっちゃん、背が高くなったなあ。」とか、雑談していると、高田はんからは、ズケズケと、

「よっちゃんは、もう好きな人、おるんでしょ。」と冷やかされた。

僕は、にやにやししながら、冗談だと思い、笑いながら、

「へへえ、なんで、そんな事、聞くんや。」と言うと、「見る目がもう大人の目や。」と高田はんは僕をじっと見た。

僕はどきっとして目をそらした。

その後は、僕は黙り込んだ。

うどん屋を出て、すぐ僕は、

「ほな、僕、もう帰るは。」と言うと、健ちゃんは、「ああ、そうか。」と

気をよくして、「こずかいや。」と言って、三百円くれた。

高田はんは、「また、お会いしたいねえ。」と僕の顔に、顔を近づけて僕の目をのぞき込む様に言った。

その時、高田はんの長い髪の毛が風で揺れた。

僕はその髪の毛のシルエットの向こうに、三条大橋の対岸の光を見てまぶしくなった。